

---

# アマガミ～恋を知らない少女と愛を知りたくない少年～

ムタ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アマガミ～恋を知らない少女と愛を知りたくない少年～

### 【著者名】

ムタ

NO5390

### 【あらすじ】

今まで「恋」という物を知らなかつた少女と「あるもの」を避けってきた少年が出会いの時、何が起こるのか?これはその結末を語るお話である

## その名はナポリタン（前書き）

初投稿の小説に行き詰まつたので、こんな書いてみました。  
携帯で書くので、残念男（初投稿小説）よりかは早く投稿できる、  
かも？

あと全話短いです。

6／14 「自分は～」の所を編集。1999年に禁書ネタは使え  
ませんよね。

## その名はナポリタン

Said 主人公

寒い。寒すぎる。

天気予報では「今日は春のような暖かい日になるでしょう」なんて言つていたが、真逆だ。

流石当たらない事で有名な予報士である。見事な予報だ。  
なんて皮肉も言いたくなるような気温にウンザリしていると、更にウンザリする場面に出会つてしまつた。

「君、今暇だよね？遊ばない？」「大丈夫大丈夫。別に変な事はないからさ（笑）」「ほら、行こうぜ」  
「えっと・・・・」

これなんてマンガ？

いや、今のはマンガに失礼だつたな。  
一言物申すなら・・・古つ！

今時そんなナンパのやり方しないだろ。今時がどんなだかは知らないが。

だが困つた事になつた。普通なら迂回して行けばいいのだが、ここは一本道。いちいち後ろに戻つてから回りこまなくてはいけない。それは非常にダルいし、何よりこの茶番劇を田撃してしまつてはいる。自分は特にお人好しという訳ではない（と思つ）が、この状況はどうにかしてやりたい」と思つた。

今所持している、

- ・財布
- ・携帯
- ・使い捨てカイロ

- ・スーパーのビーフ（中には、スペゲッティ、ケチャップ、トマトホール、合挽き肉。夕飯の食材である）
- ・コンビニのビーフ（肉まん、シャーベット）  
で、どうにかするしかないとは。  
全くもつて不幸だ・・・

( - - ) ハア

S a.i.d チンピラに絡まれた美女

「ほり、行けば」  
「えつと・・・」

私は今、ちょっと(?)ヤンチャしてそいつな男の子達に絡まれている。

(うーん、弱ったなあ・・・)

今ここに高校一年生からの親友がいてくれたら、まだマシな状況になっていたらうううと思うが、彼女とは数分前に別れたばかりだ。  
よつて今、ベンチである。

「暇なんだろ?なあ  
「きやつー」

いきなり腕を捕まれた。

結構力が強い。もちろん私の腕力じや振りほどけない。どうしよう。

「だ、誰か助「すいません、そこ」を置いてもらえますか?」け、て・  
・・?」

そんな時、片手にビニール袋を持つた女の子が不意に現れた。  
あ、凄くキレイな子・・・・じゃなくて!

「ああ、何だテメエ」

「いや、ここ通らなきゃ帰れないんで、退いてください」

「あ?」

「・・・だから、邪魔だつて言つてんだ、よつ!..」

そう言つと、女の子はビニールからケチャップを取り出した・・・  
つてケチャップ!?

そしてチンピラAの眼に向かつて発射。クリーンヒットした。

「ぐおつーま、前が見えねえ!」

「まずは1人目」

チンピラAが眼を擦つてる間に、後ろに回つて首筋に手刀1発。A  
を退場させてしまった。

「調子いいでんじやねえぞ!」

チンピラBが女の子の強さに焦つたのか、勢いよく突撃していった。

「それ、フラグだから」

女の子はそれに動じず、スルリと突撃を避け、Bが振り向いた瞬間  
にケチャップビーム。そして手刀。

あつ、と並んで間に2人も伸してしまった。

「く、くわつー。」

女の子が只者でないと気が付いたのか、今は私の手を離して走り去っていった。

(それにしても素早かつたなあ。まるで軍人さんみたい)

「大丈夫ですか？」

「え？ あ、うん。大丈夫」

「そうですか」

女の子はさう言ひてお辞儀をして歩き始めてしまった。

「ちょ、ちょっと待つてー。」

「はー？」

「名前、教えてくれないかな？」

「……波山<sup>はやま</sup>です。では」

波山ちゃんが遠ざかっていくのを見て、私はなんとなく思った。

(彼女とは、また会える気がするなあ・・・)

この時思つた事が驚愕と共に実現するなんて、今の私には分かりもしなかつた。

## その名はナポリタン（後書き）

皆さんヒロイーンの名前はもうお分かりでしょう（笑）  
まあ元より隠している訳ではないですが。

書き方は大体こんな感じです。

もしよければ、続きを読むで頂けると幸いです。

## 知らぬが仮（前書き）

すいません！若干説明が足りなかつたようで、リア友から指摘されてしましました。rz

前回は邑が1年生の春休みで3月下旬。  
で、今回は邑が2年生、つまり原作の年の4月下旬です。

## 知らぬが仮

Said 巽

「フラれた？」

「そりなんだよ。1年の大山つてヤツが登校してきた森島先輩に告つたらしい」

「いくら何でも早くないか？まだ4月なのに。で、結果は？」

「言わざもがな。当たつて碎け散つたらしい」

「まあ森島先輩だからね。そう簡単にはいかないでしょ」

「ところでさ、森島先輩つて誰？」

「「え？」

朝、教室に来て早々、中学からの友達である梅原正吉（つめはらまさよし）と橋純一（はしのりいち）が詰め寄つてきた。

何事かと聞くと、1年坊が先輩に告白して玉砕したらしい。4月から御愁傷様（もうじしまなにがし）である。

で、その森島某先輩とは誰かと聞いたら、『コイツ大丈夫か？』みたいな顔をされた。

「おい、それ本気で言つてん……まあお前なら有り得るか  
「梅原お前放課後体育館裏な？」

「冗談だよ大将。森島はるか先輩は、2年連続でミスサンタを授与した校内1の美人との噂もある有名人だぞ？」

「2年連続……ああ、去年何か騒いでたな。ミスサンタがどうのこうのつて」

俺達が在籍する輝日東高校は、12月24日に毎年クリスマスパーティーをやる。理由は、この高校の創設者の誕生日だかららしい。

きびと

そんな訳で、別名『創設祭』と呼ばれている。で、ミスサンタというのは創設祭の中で行われるミスコンの1位に輝いた人に送られる称号である。

「そんなに綺麗なのか？」

「波山も見れば納得するつて！」

橋、そんなにサムズしなくても大丈夫だから。

お前の先輩愛は充分すぎでボツシユートしたいくらい伝わったから。

「綺麗、ねえ・・・」

そういうえば、1ヶ月前くらいに襲われてた人も顔立ちが整っていたな。名前すら知らんがきっと逆ハーレムでも形成できるくらいウハウハだろ？

(ま、かんけー無いがな)

(へ)

「お、運がいいな大将。森島先輩だ」

「ん？」

男3人で下校しようと廊下を歩いていると、梅原が廊下と階段が混じりあう所を指差した。

そこには、仲良く談笑している切れ目の先輩と毛先が特徴的な先輩が、つて。

「片方の先輩に見覚えがあるんだが・・・」

「どつちなの？ちなみにクールな方が塚原先輩、力チューシャの

方が森島先輩だよ」

「・・・・・・」

「お、おい、先輩がこいつを見てるぞ」

確かに。

さつきまで談笑していた筈なのに、こっちを見た瞬間いきなり話が止まつた。

しかもガン見である。森島先輩が。

「あ、先輩がこっち来る」

「波山、お前が見たことある先輩つて・・・」

「多分梅原の予想通りだ」

成る程。あれほどの美貌なら今朝の話も頷ける。

まあ逆ハーレムどころか粉碎（男子の恋心的な意味で）しまくつて  
るがな。

「あ、やつぱり波山さんだ！」

「お、お久しぶりですね森島先輩」

「あれ？自己紹介したつけ？」

「いえ、先輩は有名人ですから」

知つたのは今朝だが。

・・・・・やつぱ本人かあ。ハア。

実は別人でした～、とか期待してたんだけどな。

「ねえ、それよりもさ」

5%

「はい」

「なんで男子の制服なんか着てるの？」

「・・・・・・・・・・は？」

「いや、似合ってるんだけどさ、何でかな～って」

「森島先輩・・・」

「無知つて、残酷だよな」

おい、まさかとは思うが・・・

「先輩」

「ん？」

「俺、男ですけど」

案の定、先輩はフリーズしてしまった。てか制服の時点で気付けよ。

「えええええ「はるか、失礼よ」むぐつ」

「ごめんね。はるかの躾がなつてなくて」

「い、いえ」

躾！？

「自己紹介がまだだつたわね。私は塙原ひびき。<sup>つかはら</sup>はるかの飼い主よ」

「（か、飼い主・・・）あ、どうもです。俺は・・」

「知つてゐる。波山邑君よね？」

何故知つてる？俺なんかしたか？

橘と梅原の方を見ると、眼を逸らされた。

おい、こっち向けやコラ。

「ふふつ、本当に有名な人ほど自分では気がつかないものよ。はる

かがいい例「

「ん、なに？」

「納得です」

「でしょ？」

「もう、なによー！」

その後、先輩方を交えて帰つた。

親友達から何も聞かれなかつたのはいいが、

てか俺の噂つて何さ？まあ予想は出来るが。

ハア、自分の女顔が恨めしい・・・

後が怖い。

## 知らぬが仮（後書き）

さて、これからどうしようか（切実に）  
あの人にフラグ立てるの難しいからなあ・・・  
また次回も会えたら嬉しいです。では

好奇心は猫をも殺す（前書き）

今回は前回の次の日の話です。

## 好奇心は猫をも殺す

Said 田

「波山一。お密さんよー」

「・・・んー?」

昼時に呼び出しどはついてないな。誰だ?

今俺に声をかけた奴は棚町薫たなまちかおる。俺や梅原達と同じ中学校出身の、俺の数少ない女子の知り合いである。

「アンタ、いつの間に“あの人”と知り合ひになつたのよ

「“あの人”?」

「ミスサンタ2冠の人」

「ああ・・・まあ成り行き?だな

あなたがち間違つていなばず。自信はないが。

「成り行きで全校男子の憧れの的と知り合える訳ないでしょ。ほら、お姉さんに言つてみなさいな」

「だから本当に成り行きなんだよ」

「アンタが成り行きなんかで・・・まあいいわ。ほら、待たせてるんでしょ」

「誰が話しかけたんだ、誰が」

全く、これだからもじや子（棚町の髪の事）は。

とか思つていたら、後ろからメンチビームが飛んできた。読心術を使うなよ。

俺はビームで収まつてこる内に廊下に出た。棚町の十八番であるH

ルボーは受けたくないからな。

### 三（一）

俺が廊下に出ると、既に人だかりが出来ていた。  
・・・こうなるから待たせたくないなかつたんだよ。

「すいません先輩。遅れました」

「あ、やっと来た」

森島先輩が人だかりから出でくると同時に、視線があちらこちらか

ら飛んできた。

う、胃に穴が空くようだ。

「それで先輩、何が用ですか？」

「あ、うん。えっとね、もうお昼は食べた？」

「いえ、まだですが」

「ならせ、一緒に食べない？話したい事もあるし

まあこの振りからはそうなるだろうな。  
しかし、これまた厄介な方に誘われたぞ。  
どうするか・・・

（少年黙考中）

まあ塚原先輩もいるだろうし、大丈夫だろ。

「わかりました。弁当取つてきます」

「本当? じゃあ屋上に来てね」

そう言つと先輩は屋上に向かつて行つた。  
「ア、屋上に行くが億劫だ・・・・・」

(――・)

呼ばれた通りに来てみたが、森島先輩以外は誰も来ていない。屋上  
に人が居ないとは珍しいが、何故塚原先輩の姿も無いんでしょうか?

「先輩、塚原先輩は?」

「え、ひびきちゃん? ひびきちゃんは水泳部の集まりで来ないけど、  
どうして?」

「いえ、別に」

まさか2人きりだとは・・・  
これまたついてない。

仕方なく先輩と2人で食べる事にした。

「このお弁当、波山君が作つたの?」

「ええ、親の都合で殆ど一人暮らし状態なんで」

「へえ、いいな。私料理はあんまり上手くないから  
意外ですね」

「それ、1年生の頃にひびきちゃんにも言われた...」  
「だと思いました」

「むう」

等と話すこと約15分。

・・・・・流石に我慢の限界だ。もう質問してもいいだろ?」

「そういえば、話つて何ですか」

「・・・あ、そうだ。波山君に言わなきゃいけない事があったんだ

!」

「先輩・・・」

頼みますよ。これじゃあ毎食食べに来ただけじゃないですか。

「あのね、この前助けてくれた時に、きちんとお礼言つてなかつたから」

「この前・・・」

「うそ。・・・あの時、助けてくれてありがとう。凄く嬉しかったよ」

「いや、本当に邪魔なだけでしたし。しかも一本道だから余計に」

それも理由の一つだが、やつぱり「助けたい」と思ったのが一番の理由。

何故そう思ったのかは不明だが。

「君は、優しいんだね」

「・・・そんな事ないですよ」

慣れない事を言われたからなのか、先輩の顔をハッキリと見てしまつた。

整つた顔立ち。

形の良い眉。

そして目。

優しく、暖かい眼差し。

まるで母親のような・・・・・・

『ゆうの髪は、凄くキレイだね』

「つーす、すいません先輩。次の授業の準備があるので、先に失礼します」

「え、あ、ちょっとー。」

俺は先輩に一礼して足早に屋上を後にして。  
次の時間はLHR

用意する物なんて、もちろん無い。

Said はるか

「行っちゃった・・・」

波山君は、そそくさと教室に行ってしまった。  
何かから逃げたように。

「何か、かあ」

多分それは「人」や「物」じゃなくて、もっと曖昧な何かだと思つ。

最も、山勘もいいところだけど。

・・・もつと彼の事を知りたい。

これは恋や愛とかではなく、好奇心。

自分が初めて感じた物を、もつと知りたいと思うのと回り。

「うん、まずはひびきちゃんに相談だ！」

この時の私には、波山田という人間を構成する上で、かなり重要な部分を掠めていた事に、これっぽっちも気が付いて無かつた。

## 好奇心は猫をも殺す（後書き）

森島先輩の口調が難しい・・・  
とか言い出したら他のキャラ全員難しいんですけどねwww  
二人を絡ませるのが、こんなにも大変だとは思わなかつたんです。  
感想や指摘などお待ちしています。  
ではまた次回に。

## **先輩方のターン（前書き）**

今回は題名通り畠と先輩方しか出てきません

## 先輩方のターン

Said とある女子高生達

「もう5月も下旬。それなのに・・・・1年の部員が掛け持ちだけってどうよ?」

「・・・・別に構わない」

「何日和つてんだ愛歌!<sup>まなか</sup>このままじゃ野点<sup>のだで</sup>以外りほっちと3人で部活だぞ!なんとか2人、いや1人だけでも茶道部に!」

「・・・・具体案は?」

「そんなもあるか!なんか茶道似合いそうな奴見つけたら勧誘!  
以上!」

「・・・・面白い。乗った」

「待つてろよ、まだ見ぬ大和撫子<sup>うわ</sup>!」

「・・・・おー」

Said 川

先輩と気まずくなつてからもう1ヶ月近くが経つた。

それまでに先輩と何度も違つたが、先輩が何か話しかけようとする度に会釈して逃げた。

臆病者

そう言つてくれても構わない。だが、こちらにも事情があるので譲れない。

先輩、牽いては『

』とは極力関わりたくないのだ。  
第一、あそこでフラッシュバックするなんて思わなかつた。

そんな5月の終わり頃に事件が起きた。

( )

昼休み。

名も知らぬ先輩に拉致られた。

・・・・・いや、マジで。

久しぶりに一人で食堂に行つて昼食を食べた後、教室に帰ろうとしたら、

「・・・・・大和撫子発見」

「でかしたぞ愛歌！」

「は？」

「さあて、ちょっと一緒に来てもうおつか

「・・・・・むじろ連行」

「いや、ちよー!?」

と、そのままどこかの教室に宣言通り連行されたりで、今。

「さて。君、茶道つていいと思わないかい？」

「茶道?」

「・・・・・和の心」

「はあ」

椅子に無理矢理座らせられ、何故か茶道について尋問(?)されて  
いる。  
いや、和の心とか言われましても・・・

「あ、ゴメンゴメン。自己紹介がまだだつたね。私は3-Aの夕月  
琉璃子。茶道部部長をしているんだ。で、こっちが

「・・・・・ 3 - A 飛羽愛歌。I am 副部長」

「どうせ『十一寧に』俺は 2 - A の波山邑です。で、何故茶道部の先輩方が俺を？」

何となく、といふかほぼ 100% 理由は分かるが念のため。

「まあ敢えて」ひから言わせてもらつが・・・波山さん。茶道部に来ないか？」

「・・・・・ Welcome」

「・・・・・・・・・・・」

やはり勧誘だつたか・・・って、波山『さん』？

・・・・・・・・・・・またか。 orz

「ハア・・・あのですね、俺「茶道部はいいぞ」。部はかなりユルいし、何より部費で菓子が食べ放題！おまけに人数が少ないからゆっくりできる「あの、ですか」「・・・住めば都。今ならお試しでも可」・・・人の話を聞いて下さい」

第一に夕月先輩、それを売りにしちゃダメだろ。  
お菓子食べ放題とか食いしん坊しか食いつかないし。  
人数が少ないのでもはや問題だし。

( - - - )

「くしゅん！」

「あれ？ 桜井、風邪でも引いた？」

「ううん。大丈夫だよ香苗ちゃん」

「そつか

「でもどうしてくしゃみなんかしたんだる？」

( - - - ? )

閑話休題。

こちらに戻らうか。

「で、茶道部。どうだ？」

「・・・・・おいでませ」

「あのですね、まず最初に言いますが、俺はおとく「あや?・波山君、  
どうしてここに?」まちか・・・」

若干強引にだが、茶道部先輩方の誤解を解こうとしたら、思わぬ人が教室に入ってきた。

いや、相手からしたら“帰つてきた”が正しいか。

「ど、どうもです。森島先輩」

「うん、久しぶり・・・でもないかな?あ、でもお話ししたのは久  
しぶりだね!」

「ええ、まあ・・・」

全力で避けてましたし。

「てか先輩、3 - Aだつたんですね?  
「言つてなかつたつけ?」  
「初耳以外の何物でもないですよ・・・」

「ハア、こつなるなら事前に調べておけばよかつた。

「か3年生の教室に連行されるなんて予想外すぎるわ！！」  
「3学年教室も避ける対象の1つだつたのに・・・

「ハア・・・」

「もう～、会つた時から溜め息ばかり。そんなんじゃダメだぞ？」

「誰のせいだと小1時間問い合わせたいが、したとこひで暖簾に腕押し  
だろ？」

「お、お前は・・・！」

「・・・（無言で構える飛羽先輩）」

「な、何だ？」

「何で茶道部の先輩方はそんなに森島先輩を警戒してるんだ？  
いや、気持ちは分かるんだけどさ・・・  
まあいいや。この隙に教室から逃げるか。」

「ちょっと待つて」

逃げられなかつた。

俺は森島先輩と一緒に帰つてきていた塙原先輩に呼び止められてし  
まつた。

「な、何でしよう？」

「今日の放課後、キミ空いてる？」

「特にありませんが・・・」

「そう。ちょっと手伝つてほしい事があるので」  
「構わないんですけど」

「良かつた。ならSHRが終わつた後に、ここにある空き教室

に来てくれる？

「了解しました」

と、ひょうひょう話し合いが終わった時にチャイムが鳴った。

「波山君。宜しくね」

「分かりました。また後で」

「ええ」

しかし一体、何を手伝えばいいのだろうか？

( - - - ? )

S a i d 三人称

邑が3・Aの教室から出た後、塚原ひびきはため息をついた。

「まったく、世話の焼ける2人だわ」

「どうしたのひびきちゃん？何だか呆れた顔してるけど

「・・・・・ハア」

「？」

塚原ひびき、苦労人である。

「まあいいわ。・・・それよりはるか、今日の放課後つて空いてる

？」

## 先輩方のターン（後書き）

塚原先輩マジ苦労人（笑）

そして茶道部トップ2参上。

夕月先輩の口調には若干の自信アリ。

次回は塚原先輩の逆襲（？）

ではまた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0539u/>

アマガミ～恋を知らない少女と愛を知りたくない少年～  
2011年9月13日23時13分発行